# 希望学宣言！

玄田有史（東京大学社会学研究所　助教授）

去年の一月、朝寝ていたら、頭の中にある言葉が突然浮かんできました。それが「かつて希望は社会の前提だった」という言葉でした（資料二ページ）。希望があるから、それを実現しようとして行動する。勉強したり、働いたり、家庭を持ったり、老後の貯えをしたりする。希望があるからこそ、そこに人間の営みが始まる。私たちは社会科学というものを勉強していますが、希望があることを前提として、人間の行動や社会の動きを考えてきました。けれども、現代はすでに希望という前提自体が崩れているのかもしれません。

私自身、これまで労働経済学を勉強してきました。ここ数年、失業の問題などが深刻でした。そんな失業の中身にはどういうものが多いのか。仕事そのものがないということもあるけれども、実際は仕事のミスマッチが多いと言われています。では、そんなミスマッチとは何か。年齢のミスマッチとか、スキル（技能）のミスマッチがよく口にされます。しかしよく調べてみると、実のところ、一番多いのは「希望」する仕事がないというミスマッチなんです。希望する仕事がないというのは、正社員の仕事がないとか、特定の専門職の仕事がないとうこともありますが、ほとんどは自分が何を希望しているのかが、わからないということなんです。

もう一つ、希望を失われている象徴的な存在が、「ニート」です。仕事もしていない、学校にも行っていない若者たちが、日本中にたくさんいます。そんなニートが話題になったときに、働く意欲のない若者とか、働く能力のない若者だとか、よく言われました。けれども、実際に話を聞いてみると、問題は意欲や能力じゃない。彼らにないのは、働くことに対する希望なんです。だから、もし仕事とか、若者の雇用問題を考えようとするならば、一体、希望はどこからくるのか、希望はなぜ失われるのか、そんなことを明らかにしないかぎり、前には進めない。そんな風に思ったんです。

希望学を始めることを決めたとき、いろいろな質問をいただきました。そのなかで最も多かったのは「希望って何ですか」ということでした。本当に、希望って何なのでしょう。さっき、所長が期待しないでくれってとんでもないことを言いましたけれども（場内笑）、正直言えば、本当は不安なんです。今日ここにたくさんの方がいらっしゃっていますが、おそらく希望の意味は一人ひとり違うでしょう。希望とは、こん

なもんだと断言することは誰にも出来ないんです（資料三ページ）。

では希望というものは、一切語り合えないのかというと、そんなことはない。希望を整理したり、みんなで話し合うきっかけを作ることは出来ると思うんです。平等という言葉があります。何を持って平等と思うか、人によって違うでしょう。それに同じ人でも、置かれた状態によって平等の意味は違う。じゃあ平等は語れないのかといえば、そんなこともない。機会の平等という言葉もあれば、結果の平等という言葉もある。最近では、プロセス（過程）の平等という言葉だってある。もちろん、そんな平等の概念を厳密に定義するとなると、それはそれで難しいけれども、少なくとも語り合う言葉はある。そんな整理をした上で、どうすれば平等な社会を創れるかとか、そのための政策はどうあるべきかを考えることは出来る。

だったら、希望だって語り合うことは、出来るんじゃないか。例えば、こんな希望の分け方がある。実現できる希望、実現ができない希望。実現可能性という言葉から考える希望だってある。もう一つ、行動につながる希望と行動にはつながらない希望と分け方もある。たた憧れである希望もあれば、その人を決断や行動に向かわせる希望だってある。実現可能性とか、行動可能性とか、そんなことからも希望を整理して行くだけでも、私たちは半歩でも進めるんじゃないか。

そして希望は、明らかに社会と関係している（資料四ページ）。今、みんなが希望を持てないというのは、やっぱり将来の社会に明るい見通しが持てないからのでしょう。将来は経済がきっと悪くなる。重税や保険負担増も待っている。将来を考えると暗くなり、希望なんか持てない。

他の希望を持たない理由だってあります。高度成長期であれば、自分の実現したいことが将来にあった。いい車が欲しい。いい家に住みたい。そんな将来の目標を求めて、今動き出すことができた。しかし成熟時代は違います。将来よりも今を楽しみたい。今、快感が得たい。今、癒されたい。今、満足したい。社会や産業の構造、消費やその時間軸だって変わってきたんです。

希望の問題は、社会によって影響される。反対に、みんながどんな希望を将来に描くかによって、社会も変わってくる。年金制度とか社会保障制度がどうなるかも、つきつめれば、みんなが社会や将来に対してどんな希望を持っているかにかかっている。希望が社会の姿を変えてゆく。そんなことを、みんなどこかで実感している。じゃあ一体その社会と希望はどんな関係をしているのか。どんなかたちをしているのか。それを考えるきっかけとなる言葉を見つけたり、そのための事実を示したい。それが、

私たちの希望学をはじめるきっかけでした。

希望と言うと必ず「それは人間の心の問題ですね」「個人の感情の問題ですね」「性格の問題で、希望を持てる人と持てない人はやっぱり一人ひとり違うから、個人の内面の問題でしょう」と言われます。もちろん、心や内面の問題もあるでしょう。しかしそれだけではなく、希望は個人を取り巻く社会とも密接に関係しているはずです。そんな社会の原動力であると同時に、社会の産物として、希望という存在を考えていきたいのです。

具体的な手がかりとして、社会に表れた希望に注目していきます。心とか内面の問題だけではなく、一つにはデータに表れた数字によって、ときには希望や絶望を経験した人の言葉によって、客観的な事実から希望の問題を考えていきたい。そのためにも、社会のなかのさまざまな状況にある方々と対話をしたい。話をしてみたい。

今日、私たちが慣れた本郷（大学）を離れて、こちら（青山）にやってきたもの、大学を出て社会に向かい合いたいという意気込みの一つの表れとして考えていただければと思います。学問の世界だけではなく、いろいろな方とお話をさせていただきながら、先ほど所長が「厨房に入っていただきたい」と話したように、実際に一緒に、話をしながら料理を作っていきたい。そんな希望学の姿を、私たちは思い描いています。

では、具体的にどんな調理方法を考えているのか。一つの事例を紹介してみます（資料五ページ）。次の佐藤香さんの報告で詳しくご紹介をしますが、この春（＝二〇〇五年の春）に、二十代から四十代までの約九百名の方に、アンケートにご協力をいただきました。その項目で「みなさんは小学校六年生のころ、そして中学三年生の頃に、なりたい職業、希望する職業というのはありましたか」を聞いてみました。

小学六年生のとき、例えば卒業文集などに書いたような、なりたい職業、希望する職業があった人は、全体の約七割にのぼりました（資料六ページ図一）。それが中学三年生になると、なりたい職業を持っていた人の割合は少々減ります。社会のいろいろな現実を知ったり、可能性を考えたりして、希望する仕事が会った人は六割弱に減っていました。ただそれも逆に言えば、六割の人が依然として何らかの希望を持っていたともいえるのです。若者に希望がないと言いながらも、案外、多くは希望を持っていたりするのです。

では、そんな希望は実現しているのでしょうか。（スクリーンの資料七ページ図二を指しながら）一番左端を見てください。二十代から四十代までの働いた経験がある方

に、小中学生の頃になりたいと思っていた仕事に就いたことがありますかと聞いた結果です。小学校六年生のときに思っていた仕事に、就いたことがある人は八パーセントに過ぎない。中学三年生の頃に希望していた仕事は、やや現実的になっていることから、十五パーセントは就いたことがあるという。これらの数字を見ると、希望が実現した人が多いとは言えないでしょう。

現在、学校や家庭では、子どもたちに「やりたい仕事を早くみつけましょう」など言ったりすることも多いようです。でも子どもたちは大人よりも現実的です。「希望の仕事なんて、どうせ無理だよ」と、現実の厳しさをどこかで実感している。文字通り、希望は「希（まれ）にしか実現しない望み」です。だから、「持ったって意味ないよ」と言いたい若者の気持ちもわかる気がしてしまいます。

けれども一方で、希望に関するこんな事実もあるのです。調査では「これまでにやりがいのある仕事に就いたことがありますか」とも聞いてみました。すると、全体の八割くらいはやりがいに出会ったことがあると言い、二割くらいはない。だとすれば、やりがいのある仕事に出会えた経験のある人はどんな人かを調べてみたくなります。すると、小学六年や中学三年のときに、なりたい職業をはっきりと持っていた人の方が、明らかにやりがいある仕事に出会う確率が高くなっていたんです（資料八ページ図三）。

実際に、その希望する仕事にほとんどの人は就いてはいません。しかし、希望する仕事ではなかったとしても、結果的にやりがいのある仕事に就いている。どうやら、希望には、実現することとは別の効果があるようなのです。

他にこんな結果もありました。あなたは「今幸せですか」ときいてみると、多くの人は「まあまあ幸せ」とか「あまり幸せではない」とか「まあまあ」「あまり」という表現を使います。けれども一部であるが「自分はとても幸せ」だと感じている人もいるのです。そしてここでもやはり小中学生のときに職業希望を持っていた人の方が、とても幸せだと答えている割合が高いのです（資料九ページ図四）。その強い幸福感は仕事に関わっているのがどうかはわかりません。しかしこのデータの結果も、希望の持つ深い意味を想像させてくれます。

小さい頃持っていた希望は、なかなか現実的には実現しない。希望には、具体的に求めれば求めるほど、出合う確率は下がってくるという面があります。だから、希望をめぐる名言を探ると、希望とはすなわち絶望のことであるとか、希望と絶望は裏返しの関係だといった言葉によく出会います。

多くの場合、希望は絶望に繋がる以上、挫折を伴うものです。しかしその挫折を経験することではじめて、自分の理想と現実の距離を調整し、自分の中の希望を修正していくことによって、希望を持たなかったならば到達できなかったような、より高い充実を得られる可能性があるのです。

希望は、求めれば求めるほど逃げていく。けれども希望を持たなければ、得られない満足があるのです。それはパラドックス、希望の逆説なのです（資料十ページ）。一体なぜそうなのか。希望を考えるということは、同時に挫折の意味を考えることなのかもしれません。希望によって得られる挫折をどのように調整していくことで充実にたどり着けるのか。希望学では、そのプロセスを具体的に明らかにしていきたい。

希望を持つことによって、人は考え方が変わる、行動が変わる。社会との関わり方が変わる。それが、希望を持たなかった場合とは違う自分を作り出す。一体これは何なのか。それを、具体的な数字や調査によって、私たちは言葉にしていきたいと思うのです。

目的として求めても、希望はほとんど実現しない。しかし希望を持つことによって、はじめて生まれるプロセスがある。希望がきっかけとなって、人は社会や環境を変えていく。そんな希望の生み出すプロセスを、私たちは一つひとつ、具体的に明らかにしていきたいと思っています。

では、それをどうやって明らかにしていくのか。希望を持つに至るプロセスをどう分析するのか（資料十一ページ）。私たちはいわゆる「学者」です。だから、（学者として）できることを（まず）やっていきたいと思います。先ほどご紹介があったように、社会科学研究所では、これまで様々な社会に関する調査をしてきました。そんな研究蓄積を活用しながら、希望というテーマにチャレンジしていきたいと思います。希望学は、自分たちがやってきた分析や考え方がどこまで役に立つのかというチャレンジでもあります。

さらにこれからは、希望について話をする「希望サロン」という機会を設けていくつもりです。そのなかで一人ひとりがゲストとして、同時にホストとして、希望について語り合う。ときには、絶望の淵を経験された方の語る希望という言葉に耳を澄ませながら、希望と絶望の関係、希望のパラドックスについて考えていきたいと思います。私たちは、自分たちの研究結果を謙虚さを持って示しながら、情報提供と道案内をさせていただくつもりです。自分たちの世界、自分たちの住み慣れた（学者の）世界だけで流通しあう言葉ではなく、希望という問題を、多くの人と語り合える言葉に

していきたいと考えています。

希望学の問題を考え始めて、既にいろいろなご意見見をいただいてきました。なかには、希望学によって、どうすれば希望が得られるのか、希望を得られる方法を教えてくださいと、おっしゃられることもありました。そもそも、希望を持つことはいいことなのかどうか、それ自体、大きな問いかけだと思います。例えば失業の問題を考えるとき、失業は減ったほうがいいと私は思います。ニートの問題を考えるときも、ニートは働いたほうがいいと考えます。ただ、そういう自分の願いや価値観は当面心の片隅に置き、まずは希望と社会の関係について事実を見極めることのほうが重要だろうと考えます。実証分析、歴史研究、インタビューなどによって、社会のなかので希望についての事実を見極めることで、特定の価値観に拘束されない希望の議論ができる環境を作ることが先決と考えます。

今、希望に関わる本がたくさんあります。後で登場される山田昌弘さんの書かれた「希望格差社会」という本も有名です。先日、インターネットを使って調べてみたら、「希望」をタイトルにしている本が、千六十六冊もありました。その中で百二十三冊が、昨年（二〇〇四年）から今年（二〇〇五年）にかけて出版されたものです。

希望、希望、希望・・・。いろいろなところで、希望という言葉を目にします。最近ちょっと希望中毒で、街中で希望の文字を見るとドキッとします。「大盛り希望無料」なんて書いてあると、「私は結構です」なんて思ってしまったりする（場内爆笑）。いろいろな希望がある。けれどもしかしたら、社会のなかには、ウソの希望、偽りの希望もあるかもしれない。希望というニュアンスを売り物にして、かえって混乱や不安を掻き立てているものもあるかもしれない。だからこそ、希望について、本当の風通しの良い議論をしたい。

希望を語り合うのは難しい。一人ひとり違うし、心や内面の問題と関わっていいたりする。けれども、決して語り合えないものではないはずです。実現可能性や行動可能性などを考慮しながら、世の中の希望を一つひとつ整理していく。他にも重要な希望の語り口はあるでしょう。そんなことを考えながら、みんなで希望について語る言葉を持ちたい。それが、今希望が持てない人にとって、自分で考え、行動するヒントになれば。これほどうれしいことはないと思います。

私たちは、こうすれば（希望が）見つけられるという、希望についてのセールスをするつもりはありません。ただ、希望について考えるきっかけを、少なくとも3年はかけて、コツコツと提供していきたいと思っているのです。

希望について考えるときに、厳しい意見もいただきます。ある人からは、希望の研究なんて、必ず失敗すると言われました。そんな難しいことが、わかるはずがないと言われたりもしました。しかし、厳しいけれど、難しいからこそ、やってみたい、チャレンジしてみたいと、私たちは思うのです。難しいから、成功することが叶わないだろうから、やらないという考えも当然あるでしょう。

けれども学問というのは、本当はすべてがベンチャーです。学問のなかには、自分の書いた論文を有名な学術雑誌に載せることだけを目的にやっている研究だってありますし、それはそれでとても重要なことだとも思います。けれども、やってみたいからやる、やるべきだから、と思ってやる学問だってあっていい。

希望学はベンチャーですから、これからデスバレー（死の谷）だって待っているでしょう。私たちも希望学の研究がそんなに簡単にいくとは思っていません。ですから、今日お願いをしたいのは、希望学を皆さんと一緒にやっていきたいということなんです。私たちは、みんなで話し合い、考えられる環境を作りたいと思っています。そこで、私たちもみなさんから希望について教えてほしい、学ばせていただきたいと思います。そういう思いで、今日このようなシンポジムを、私たちは開くことにしました。

私たちはこれから自分たちのできることを、これから精一杯やっていきたいと思っています。そのなかで、希望サロンなど、いろいろなかたちで希望をリアルな問題として社会の問題として考えていく場を設けることを企画しています。詳細は、決まり次第、希望学のホームページなどでお伝えしていくつもりです。

希望学は、確かに難しいかもしれません。うまくいかなかったら「ほら見たことか」と、言われるかもしれません。でも人の批判をするだけなら、簡単です。しかし、後出しジャンケンばかりしていても仕方がないでしょう。まずはこちらから動き出します。以上、希望学宣言ということで、希望学で何をするのか、どういうことを考えているのか、その一端を皆さんにご紹介させていただきました。今日はたくさんの方にお集まりいただいて、本当にありがとうございました（拍手）。